

池田古墳 発掘調査 現地説明会資料

平成19年11月18日(日)
朝来市教育委員会
埋蔵文化財センター

1、はじめに

市内和田山町平野にある池田古墳は、但馬の中で最も大きな前方後円墳で、兵庫県でも4番目の規模を有します。昭和46年(1971)の調査で、葺き石・埴輪・周濠を備え持つ古墳であることが確かめられました。その後、10回以上にわたって確認調査が行われています。現在、古墳の大きさや形などの基礎データを得るために、平成18年度から国庫補助事業として発掘調査を実施しており、今年度は2年目になります。

2、現在の状況

墳丘は旧状がかなり損なわれており、もとの姿をうかがい知ることはできません。つくられた当時は小高い山であったと想定されます。明治40年前後にJR山陰本線敷設に際して、古墳が削られて土が持ち出されました。埋葬施設がある後円部も削られているので、埋葬施設の詳細は不明ですが、ここから4kmほど離れた高田地区の墓所に長持型石棺の破片があります。長持型石棺は「王者の棺」と呼ばれ、近畿では大王の墓である大規模な古墳に納められていることがわかっています。これらのことから、但馬の王墓にふさわしい池田古墳には、高田地区の長持型石棺が埋葬されていた可能性が高いと考えています。

3、平成18年度の調査

昨年度は古墳の後円部南側を調査し、古墳の裾を示す葺き石を確認しました。また、造り出しと呼ばれる古墳から飛び出した部分が存在することがわかりました。出土した遺物は埴輪がほとんどですが、中には但馬では初めての鳥形埴輪や、復元すると1mを超える家形埴輪などがあり、古墳がつくられた時代背景を想像させてくれます。

4、調査の概要

調査は、後円部側に調査区を2箇所(東側と西側)設定して行いました。西側調査区の南側を1-Sトレンチ、北側を1-Nトレンチとしています。また、東側調査区(池田橋に近い方)の南側を2-Sトレンチ、北側を2-Nトレンチと呼ぶことにします。

【1-Sトレンチ】墳丘に近いところに設定しましたが、古墳の墳裾は確認できませんでした。墳裾は現在の住宅側にあると考えられます。周濠の底は地表面から約2.2m下で確認しています。

【1-Nトレンチ】現在の市道に近いところに設定しましたが、周濠の北側端は確認できませんでした。トレンチ部分は周濠の中であると考えられます。周濠の底までの深さが墳丘側は約1.8mであるのに対し、市道側は約1.2mで、徐々に上がっていく状況がみたと

れます。

【2-Sトレンチ】古墳の墳裾（基底部）にあたる葺石を確認することができました。根石部分は一回り大きな石を使用しており、部分的に石の下に木を置いて石が沈まないような工夫をしています。葺き石には河原石と山石を併用して使っています。葺き石より墳丘側にテラス状の平坦面が約2mあり、最下段のテラスと思われます。葺石の上面には埴輪と礫が混じった土が堆積していました。

【2-Nトレンチ】周濠の北側端の可能性を考えて設定しましたが、明確な端ラインは確認できませんでした。2-Nトレンチは周濠の中であると思われます。周濠の底までの深さは墳丘側約1.2m、市道側約1.0mで、1-Nトレンチと同じように徐々に濠底が上がっていく状況を確認しました。

【出土遺物】出土した遺物は大半が埴輪の破片です。平成18年度の調査では1つの埴輪が倒れた状態で発見されていましたが、今年度の調査ではあまりまとまって埴輪が出土したところはありませんでした。種類としては円筒形・朝顔形が多く、わずかに衣蓋形きぬがさがみられる程度です。円筒埴輪のつくり方をみると畿内のつくり方とよく似ており、結びつきの深さを表しています。埴輪のほかには、10～11世紀の黒色土器や土師器碗などが出土しています。

5、まとめ

今回の調査では、古墳の北側で墳裾（墳丘基底部）が明確になったことが大きな成果と言えます。昨年度の調査結果とあわせてみると、古墳の大きさは約136mになりそうですが、さらに詳細な検討が必要であると思われます。また、周濠の北側の端が確認できなかったことから、周濠は現在の市道付近まで伸びていると考えられます。池田古墳がつけられた時期は、出土した埴輪から5世紀初め頃、史跡茶すり山古墳よりも古いと考えられます。



2-Sトレンチ 古墳墳裾のようす
(写真の下側、石があるところまでが古墳の範囲)



2-Sトレンチ 墳裾を示す葺き石
(写真右側では石の下に木を置いているようすがわかります)

【参考 平成 18 年度調査で出土した埴輪】



鳥形埴輪
(頭の部分で、目は赤い顔料が残っています)



家形埴輪
(家の屋根部分です)